Program 2月のプログラム

講義

1(木),14(水),15(木)
12小預言書
永井 学院長

「ホセア書」「ヨエル書」など、預言書のなかでも、比較的短い「小預言書」と呼ばれる、十二の預言書について学びます。

2(金),9(金),13(火)
伝道実践

近隣の町でのトラクト等の配布や訪問伝道、関係づくりなどを行います。その他、伝道ライブなども行います。

講義

6(火)～8(木),20(火)～23(金)
聖書の創造論
高橋 清師

創造論について学びます。神様の創造の御業に関しての理解を深め、さらなる確信を得ることが出来ます。

講義

27(火),28(水),3/1(木)
成長セミナー
永井 基呼師

信仰を持ち始めたばかりの方や求道者の方に、キリスト教の基本的な教理などを、専用の絵を用いて分かりやすく教える事が出来るようになるための学びです。

拡大宣教学院30周年記念聖会

2018 4/17(火) 14:00～ 第一聖会, 17(火) 19:00～ 第二聖会, 18(水) 10:00～ 第三聖会

主講師 キム・ジョンイル師【韓国 スクール・オブ・オーガニック・プランターズ校長】

ぜひ、ご参加ください。お祈りください。 17日 11:00 から入学式、卒業式が行われます。

参加申込要項 ▶▶ 申込みの際は、参加者全員の氏名と所属教会名を下記メールか FAX にてご連絡ください。

gospeltown@infoseek.jp 022-345-2992

宿泊のご案内 ゴスペルタウンでの宿泊は、人数に限りがあるため、できるだけ最寄りの宿泊施設に、ご宿泊ください。ご理解、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

最寄りの宿泊施設のご案内

- ■ホテルルートイン仙台大和インター ☎ 022-344-5711 ウェブあり
- ■大和パークホテル ☎ 022-345-6680 ウェブあり
- ■ビジネスホテル新ばし ☎ 022-345-7887 ウェブあり

編集後記 Editor's Note

ハレルヤ!!年が明けて1カ月が過ぎ、寒さがより一層厳しくなってくる頃かと思われますが、皆さまはいかがお過ごしでしょうか?今冬は「40年ぶりの大寒波襲来」と巷でも騒がれるなか、ここ大衡村でも、（ゴスペルタウンは特に?）ここ数年無かったほどの寒い日が続き、最高気温でも氷点下という日があります。また、インフルエンザも、各地で猛威を振るっているようです。このような中にあっても、健康が守られ、主の働きを全うできるよう、互いに祈り合っていきたいですね。

さて、今年は記念すべき「拡大宣教学院30周年」の年なので、前号の表紙には、完成して間もない頃の、今回は建設中のゴスペルタウンの写真を使用している訳ですが、こうして建設当時や、初期の頃の貴重な写真を物色していると、諸先輩方が築き、守ってきた、何より主がこれまで守り導いてくださった学院の歴史を、ほんのわずかかも知れませんが垣間見ることが出来、感慨深いものがあります。

また、5月はマグニファイ発行30周年（初期「拡大宣教学院ニュース」含む）でもあるので、それを記念した増頁版の発行を計画中です。是非お祈りに覚えつつ、楽しみにして頂ければと思います。

Magnify 拡大宣教学院 機関紙 マグニファイ ■発行人：永井 信義 ■編集：東海林 真

〒981-3604 宮城県黒川郡大衡村ゴスペルタウン 022-345-2991 022-345-2992
gospeltown@infoseek.jp 郵便振替：02240-7-34622 facebook「gospeltown」

建設中のコスペルタウン

拡大宣教学院 GOSPEL TOWN

Kakudai Mission Institute No.354

Magnify

拡大宣教学院 機関紙 マグニファイ

2 2018 Feb.

CONTENTS

巻頭メッセージ
人の歩みは主によって確かにされる
谷後 義則 師

特別講義レポート
いのちと性の大切さ

ザ・スポットライト
インタビュー編
第20期卒業生 川津 智美
（クロスロード・ゴスペルチャーチ）

BOOK あらかると

人の歩みは主によって確かにされる

イエス・キリスト福音の群 イエス・キリスト宮崎福音教会 牧師 **高森 基信** 師

今年、拡大宣教学院が30周年を迎えられることを心から感謝します。私が拡大宣教学院に第7期生として入学したのが24年前。原稿の依頼を受けて改めて年月の流れる早さを感じました。

まず、自己紹介と現在に至るお証をさせていただきます。1975年12月生まれ、南国宮崎出身。牧師の家庭に生まれ、聖書の話は物心ついたときから聞いておりましたが、神の愛、十字架の救いを信じることができずに、思春期の闇にのまれながら、進学校に進みました。大学受験を控え、親が牧師なので、なんとなく牧師になるのかなと思っていたのですが、自分の内側の罪や汚れを見ると、進路も決まらず、迷い弱っていたところ、私にとっての神様のファーストコンタクト（注：神様はいつも手を延べておられます。あくまで私側の視点でお読みください）。「この世の弱い者を選ばれたのです」（Ⅰコリント1：26～31）のみことばから召命を受けました。キリストの救い、神の愛に触れ献身。今思い返すと礼儀も知らない18歳の子どもが神学校に入学しました。

3年間の学びは親元を離れた解放感と、助けて下さる方々によって、楽しく不自由なく過ごすことができましたが、いざ卒業し親元に帰ってみると自立できていない自分を改めて感じ、再び悩む日々でした。その時、神様からのセカンドコンタクト。祈りの中で拡大宣教学院で一からのやり直しに導かれ、再び拡大宣教学院に移り、住み始めました。追い帰されるのを覚悟していましたが、永井学院長が受け入れて下さり、学生時代を合わせると17年、主に学院スタッフ兼東北中央教会主事として勤めておりました。その間に結婚し、4人の子どもにも恵まれ、2011年に妻の実家のある北海道へ。その中でも神様によって練られ、教職者としての働きをやめたこともありました。十勝キリストリバイバル教会で副牧師として働きを始め、そこで出会った人たち、牧師仲間や信仰の友に励まされ、北の大地で6年が経過。ここが最終地だと思っていましたが、2017年、神様のサードコンタクトにより故郷の宮崎へ。書くと長くなるのでこの経緯は割愛させていただきますが、振り返るとすべての歩みの中において神様の導きがあったことを感じています。

「人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。」（詩篇 37：23,24）

新共同訳では「主は人の一歩一歩を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。」とあります。神様は私たちの歩みを定めて下さいます。もしかするとその歩みは遅く感じることがあるかもしれません。しかし、振り返ると神様の計画の綿密さを知ることができるのです。私自身、ある方には「時間を無駄にしたね」と言われましたが、振り返ると歩んできた人生が決して無駄ではなかったことを覚えます。特に拡大宣教学院での学びと働きや出会いで成長させられた部分は大きいのではないでしょうか。

何年経とうが、何歳になろうが私たちが一歩一歩、主の確かにされた道を歩むのならば、それが人の目には認められることのないものであったとしても、主はその人の道を喜ばれ祝福されるのです。エジプトの宰相となったヨセフはまさにそのような人生でした。彼は幸せな未来を想像できない状況下で、目の前に起こる一つ一つのことに主の御心を求めました。

反対に人の目にはどのような素晴らしい人生であったとしても、主によって定められた歩みでなければ良い人生とはいえないのでしょう。どんなに大きな功績を挙げても、人に尊敬されようとも、歴史に名を残そうとも、主が確かにされた歩みでなければ虚しいのです。

世の終わりのメッセージが世界中で発信されている昨今、ますます拡大宣教学院の働きが祝福され、主に喜ばれる働き手が起こされていくことを期待しています。

The Spotlight Vol.3

ザ・スポットライト Vol.3【インタビュー編】

帰郷してからの一年の歩み

毎回誰かにスポットを当てて、様々な事をレポートして頂く「ザ・スポットライト」。今回は、昨年1月1日にゴスペルタウンから、地元福岡に帰郷し、現在は、母教会である佐賀県鳥栖のクロスロード・ゴスペルチャーチでご奉仕されています、拡大宣教学院卒業生の川津 智美さんに、インタビュー形式で質問に答えて頂きました。

第20期卒業生 川津 智美
クロスロード・ゴスペルチャーチ

地元福岡に帰郷して1年になりますが、帰郷してから最初に大変だと感じたことは何でしょうか?

勤務先の近くに引っ越しをする為、色々な所を見学をしましたが、なかなか希望に見合う物件に出会えず、苦労しました。色々と妥協して決めた物件の契約を進めつつ「この部屋での生活を祝福し、守って下さいますように」と祈っていたら、賃貸ショップの BGM でゴスペルの「ハレルヤ」が流れてきて、励まされながら、手続きを進める事が出来ました。

ゴスペルタウンでの生活と、今の生活で、大きく変わった点をいくつか教えていただけますでしょうか?

色々な状況のなかで、一人で判断しなければいけない場面が増えた事です。学院では、信仰の仲間がすぐ側にいたので、直ぐに色々と悩みを打ち明ける事が出来たり、気持ちをリセットする為に、一緒に出掛けたり出来ましたが、今はそういった機会が減ったので、犬と散歩しながら祈り、気持ちの整理をしています。(笑)

「今だから言える、ゴスペルタウンでの生活で辛かったこと」と言ったら何でしょうか?

福岡では「雪かき」を経験していないので、「雪かき」が本当に辛かったです。雪が積もると、ゴスペルタウンでの雪かき後に、出勤先での雪かきを行い、その後通常業務に入るので、そういう日は、睡魔との戦いでした。そういえば、雪かきの筋肉痛を癒す為に、女子寮の仲間と温泉によく出掛けましたね。

逆に、感謝だったことや楽しかったことは何でしょうか?

日曜学校の子ども達と一緒に、勤め先のクリスマス会で賛美を歌ったりダンスをした事です。子ども達が自主的に練習している姿や、アレンジをしているのを見た時は、感動して泣いてしまいました。スタッフの方々や、おじいちゃん、おばあちゃんも、本当に喜んでくれました。他に、伝道実践の週に、近くの駅で賛美を歌った事も、凄く良い経験でした。立ち止まって賛美を聞いてくれた方が、教会のチラシを受け取ってくれたのが本当に嬉しかったです!

現在は、教会でどのような奉仕をなさっているのでしょうか?

現在、幼なじみの友達と一緒に教会に行っていますが、その息子さんで今年7才になる「ゆうま」君に、聖書のお話をしています。先日、彼に「聖書のお話がよく分かるようにお祈りするね。」と言うと「僕、自分でイエス様にお祈りする!」と言ってくれました。子どもの信仰の成長を友人と一緒に見れる事が本当に嬉しいです。

教会以外でも、奉仕や何か別の働きなど、なさっていますか?それは、どのような奉仕・働きでしょうか?

5人の方にピアノの奏楽を教える機会が与えられています。他に、職場の友人や子ども達への伝道の機会になればと、妹と一緒にクッキー作りのイベントを開きました!

帰郷してからの1年のなかで、学院で学んだことや経験したことが用いられたということがあれば、いくつかお証ししてください。

学院での共同生活の中で、お互いの違いを受け入れ合う事や、持ち物を譲り合う事、相手を知ろうと努力する事、相手を決めつけない事、責めない事、助け合う事、そっとしておく事、一緒に奉仕する事、一緒に食事をする事など……他にも、まだまだありますが、そういった事の大切さを学びました。そうして培った経験を現在の職場や家族、また友人や知人に対して生かせるようになってきました。

あとは、学院にいる時に、同期の木原成美さんに何度か、サインダンス教えて頂いたのですが、昨年開催されたクロスロード・ゴスペルチャーチの10周年記念礼拝で、そのサインダンスが用いられました。

最後に、今後の抱負や目標をお聞かせください。

今後も、親戚や友人、知人にイエス様のことを伝えていきたいと思います。昨年は、熊本に住む祖母が、イエス様を信じると告白しました。母と一緒に祈り、導きを期待して、祖母にイエス様の事を語る事が出来ました。特に、天における約束について、明確に語っている母の姿に感動しました。
今年も家族が一丸となって、伝道していきたいです。

Special lecture report 特別講義レポート

いのちと性の大切さ

藤田 桂子師

レポート：第24期生 黒田 広輝

実のところ、講義を受ける前の私は、「性同一性障害」に対する関心が薄かった。そういう人もいる、程度にだけしか捉えていなかったところがあった。しかし藤田桂子師による熱のこもった講義を通して、その傷の深さを思い知らされ（今もいっそう悪化し続けている）心痛めざるを得なかった。

同性愛、性同一性違和感（「障害」という言葉を避けてこのように言われる）は、時代とともに様々な認識がされてきた。近年においては、それを認める国は少なくない。結婚が認められ、法によって確立され、驚くべきは、カウンセリングや治療をすることが違法とされる国もあるほどだ。性意識の混乱に乗じた同性愛容認の流れは拡大していて、私達日本人も「対処が遅かった」と嘆くことにならぬようにしていきたい。

藤田師による講義の後半は「教会がどう対応すべきか」についてであった。耳の痛いことであるが、これまでの教会の反応といえば、拒否や無視が多かったのである。得体の知れない故にそれを恐れ、敬遠してきてしまった。同性愛者の多くは、教会を敵として感じている。「教会はいつも私たちを罪人扱いしてくる。」しかし、教会が罪人を拒否するようでは、神のみこころはどこにあるのだろうか。同性愛を正しく理解し、彼らを受け入れ、同じ罪ある者、赦しを受ける者、癒しを受ける者として、共に歩むことが御心ではないか、と語られた。

世間では性同一性障害は生まれつきだと言われることもあるが、そこには原因がある。親との愛着関係の欠乏や性的虐待などによって傷ついた心が混乱を生じさせている。彼ら自身、その苦しみの中で一人闘い、鬱病になり、また自殺する人も多くいるのである。教会は彼らを神の愛で抱き、その苦しみを分かち合える場所であってほしいと願う。

藤田師自身も、そのような働きに長く就いておられる。その話を聞くに、苦しみからの解放のプロセス（心開き過去を打ち明け、向き合っていく）は、とても時間を要するものである。一度教えれば治るわけでなく、聖書を一度読むだけで全てスッキリできるわけでもない。そこには生涯をかけて向き合い続け、何度も聖書に立ち返り続けていく闘いがある。藤田師には一人一人とその長い道を歩む覚悟がある。私にも同じ覚悟が持てるだろうか。

藤田 桂子師

ジャパン・クリエイティブ・ミニストリー（JCM）代表。カナダの神学校で学び、短期宣教師としてロシアで働く。その後、児童伝道の宣教団体で奉仕。2002年に教会を強め、子どもや中高生を中心とする働きをするため、JCMを設立。

BOOK あらかると

永井信義

先月はギリシャ正教の司祭のものでしたが、今回はカトリック司祭ムケンゲシャイ・マタタ神父の『明日を思いわずらうな』（幻冬舎）です。日本を「第二のふるさと」と言う、在日 28 年のコンゴ出身の神父は、本書で「思いわずらい」への対処の仕方、「神に祈り、頼ること」、「人を信じる」（お金は信じない）などを、自身の体験を交えながら伝えてくれています。

「人を信じることによって、人を助けることによって、人に助けられることによって、本当に生きる喜びがわいてくる」

「まず神の国と神の義を求めて、あとはおまかせしちゃう。これができる人が本当に幸せな人じゃないかなと思うのですが」